

主体的な進路選択－知的障害養護学校における 進路学習についての授業研究

Independent course choice – A Study on classes of course learning
in two schools for mentally retarded children

渡辺明広*・杉山晴美**・亀山修児***

Akihiro WATANABE, Harumi SUGIYAMA, and Shuji KAMEYAMA

はじめに

現在、各地の知的障害養護学校の高等部において、生徒の主体的な進路選択にあたり、自己選択、自己決定を重視し、そのための生徒への適切な情報提供と自己理解の促進を行なう「進路学習」が実践されている。しかし、生徒の主体的な選択・決定の重視や進路学習、移行支援の実際は、まだまだ理念の世界にあり、学校現場や教師間の認識の格差があまりにも大きいとの指摘もある。⁽¹⁾ 特に、生徒の実態が重度化、多様化する中で、主体性の育成（自己選択、自己決定の促進）と自己理解の支援に関しては、指導実践上の重要課題であり、自己理解の支援の課題化、自己選択・自己決定のための学習内容の選定と計画的な配置、学習課題の焦点化の方法についての検討が必要である。また、授業方法の工夫においては、学習の個別化や視覚教材の工夫・活用、学習の整理のための学習カード（作業日誌、ワークシート）の活用といったことが必要になる。

本稿では、2校の養護学校における授業実践をもとに、生徒の実態に即した、学習内容と指導方法の検討を行なうことで、これらの課題について考える。

1 主体的な進路選択－新たな進路指導：進路学習の授業実践と課題

1990年代後半から、多くの知的障害養護学校の高等部においては、生徒を進路選択と社会参加の主体に位置づけた、新たな進路指導が展開されている。この進路指導の実践は、従来から行なわれている産業現場等における実習（進路体験。以下、現場実習という）と進路相談に加え、生徒の自己選択・自己決定を意図した進路学習から構成される（図1-1）。すなわち、進路選択における主体性の形成は、①社会的認識を培うこと（進路学習）、②経験を拡大すること（現場実習）、③自分で進路を選択すること（進路相談）等の内容と過程が必要である。⁽²⁾⁽³⁾ 具体的実践として、進路学習の実践と、移行期における個別移行支援計画の実践があげられる。⁽⁴⁾ 「個別移行支援計画に基づくネットワーク支援」は環境整備の基本である。

*静岡大学教育学部障害児教育教室 **静岡県立藤枝養護学校

***静岡大学教育学部附属養護学校

また、進路学習については進路に関連する事項を計画的、段階的に学び、現場実習や職場見学等による進路体験に基づいた社会的認識や自己認識（自己理解）を培うことが目標になる。これらの学習や体験をもとに、個別の進路相談において、主体的に実習先や進路先を選択することになる。自分にあった仕事や活動として、生徒が本当に望み、主体的に選択していくことが可能ならば、卒業後の企業就職者の定着率が改善できるのではないか、と考えられている。⁽⁵⁾

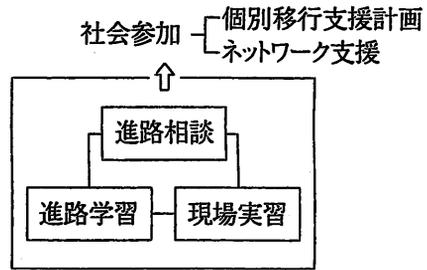


図1-1 新たな実践的枠組みく実践モデル

進路学習で取り上げられる内容としては、i さまざまな職業や職種、自分の適性と仕事、ii 住居や生活の場（グループホーム、通勤寮、アパート）、iii 給料と経済生活、iv 余暇利用の仕方、v 福祉サービスの利用（療育手帳、支援費制度）、vi 権利擁護（消費者被害への対応）、などであり、これらを高等部の3年間でスパイラルに配列することで学習内容の定着・発展をめざす。また、自己選択、自己決定が実現するには肯定的な自己理解が基盤・原動力となるが、内海は「できること・できないこと」の実践は多いが、障害も含めた自己の理解と受容、さらには権利や必要な支援（活動制限を補い、参加制約を防ぐ方法）についての理解へ発展させた実践は限られていると指摘している。⁽⁶⁾

各地の養護学校の実践報告によれば、全般的にいて、進路指導全体は教科や領域を含むすべての教育活動の中で、生徒の多様な実体験に基づき行なわれている。進路学習の実施形態は、①時間割上に特設した進路学習の時間を設け実施、②教科や領域等における指導の内容の単元として実施、③現場実習の事前・事後学習にて実施の3ケースに分類できる。全国の実施状況は、特設した時間割を持ち年間を通して計画的に指導している学校が42%、単元で扱うケースが22%、実習の事前・事後で扱うケースが36%である。特設した進路学習の授業の教育課程上の位置づけは、教科「職業」および「総合的な学習の時間」に位置づけられる傾向にある。⁽⁷⁾

進路学習が展開する学習集団は同一学年による学級集団であり、指導は進路担当教師と連携して担任が中心となり行う。重度化、多様化している生徒集団において、友だちの体験から自分に必要な情報を取り込み、互いの体験を評価しあうことで、仲間意識を育てながら、社会についての認識と自己理解を深めている。⁽⁸⁾しかし、実習活動を中心とする伝統的な進路指導観から体験的に「進路・職業を知る」ことに進路指導の重点が置かれがちな傾向も根強く、自己理解の実践的位置づけは必ずしも十分ではない、という指摘もある。⁽⁹⁾

II A 養護学校高等部における授業実践

1 進路学習の年間計画

本校高等部のⅡ類（職業グループ）は、身辺自立や家事の分担、身近な地域資源の活用などの体験的な学習により、スキルを身につけるとともに、働く意欲や体力と態度を育成することを目指している。進路学習のねらいは、自らの課題を体験から学び、具体的な卒業後の生活のイメージが描けることである。1年次の進路学習の年間計画（目標と単元など）は表Ⅱ-1のとおりである。

2 授業実践：単元「働く人をめざして」

① 生徒について

表Ⅱ-1 進路学習の年間計画 <高等部1年 II類(職業グループ)>

目 標	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解を深めるとともに、いろいろな仕事や生活を知り、自分の適性や希望と合わせて進路を考えることができる。 自分の役割を果たすことや働くことの大切さを感じ、進んで「働こう」という気持ちを持つことができる。 あいさつや身だしなみなど、社会人として望ましい、人との関わり方を覚える。 		
一 学 期	6/27～29 進路学習 6/30～7/6 校内集中作業（5日間） 7/6 進路学習		
	初めての校内集中作業 ○自分のことを知ろう ○いろいろな仕事 ○校内集中作業にむけて ○委託作業に挑戦 ○校内集中作業の反省 <ul style="list-style-type: none"> 自分の成長を知り、もうすぐ働く人になることを感じるができる。 いろいろな仕事があることがわかる。 働くに当たり大切な基本的なことを知る。(あいさつ、身だしなみ、正確さなど) 働く人になるための自分の課題を教師と一緒に考えることができる。 		
二 学 期	11/4・7 進路学習 11/7～10 校内集中作業（4日間） 11/10・11 進路学習		
	働く人をめざして ○働く人の生活を知ろう ○会社の仕事に挑戦しよう ○仕事に挑戦してみよう ○働く人の心構え <ul style="list-style-type: none"> 仕事をする上でのルールやマナーを知り、働く人をめざして仕事に取り組もうとする気持ちを持つことができる。 校内集中作業で頑張ったことを振り返り、仕事をしての感想などを発表する。 「現場実習」について知り、実習先や仕事の内容についての希望を自分なりに発表する。 		
三 学 期	1/20～30 進路学習・校内集中作業(5日間) 1/31～2/15 現場実習(12日間) 2/16・20 進路学習		
	初めての現場実習 ○働く人の心構え ○現場実習に挑戦 ○現場実習の反省 ○進路について <ul style="list-style-type: none"> 現場実習への意識を高める。 社会の中で働く体験をし、働くことを具体的に意識する。 「頑張ったこと」と「頑張りたいこと」について自己評価ができる。 		

※ 本校では生活単元学習の中で進路学習を行っている。

高等部1年には31名の生徒が在籍している。本グループはそのうち9名（男子4名・女子5名）の生徒で編成されている。皆「働く」ことに前向きで、見通しが持ちやすく、できる作業活動であれば、続けて取り組む生徒たちである。しかし、高等部卒業後の生活をイメージできている生徒は少ない。今後、より具体的な活動を繰り返しながら知識を広げ、活動に対する見通しをもち、他者からの情報も得ながら「卒業したら働く」という意識を育てていくことが課題の一つである。

② 単元について

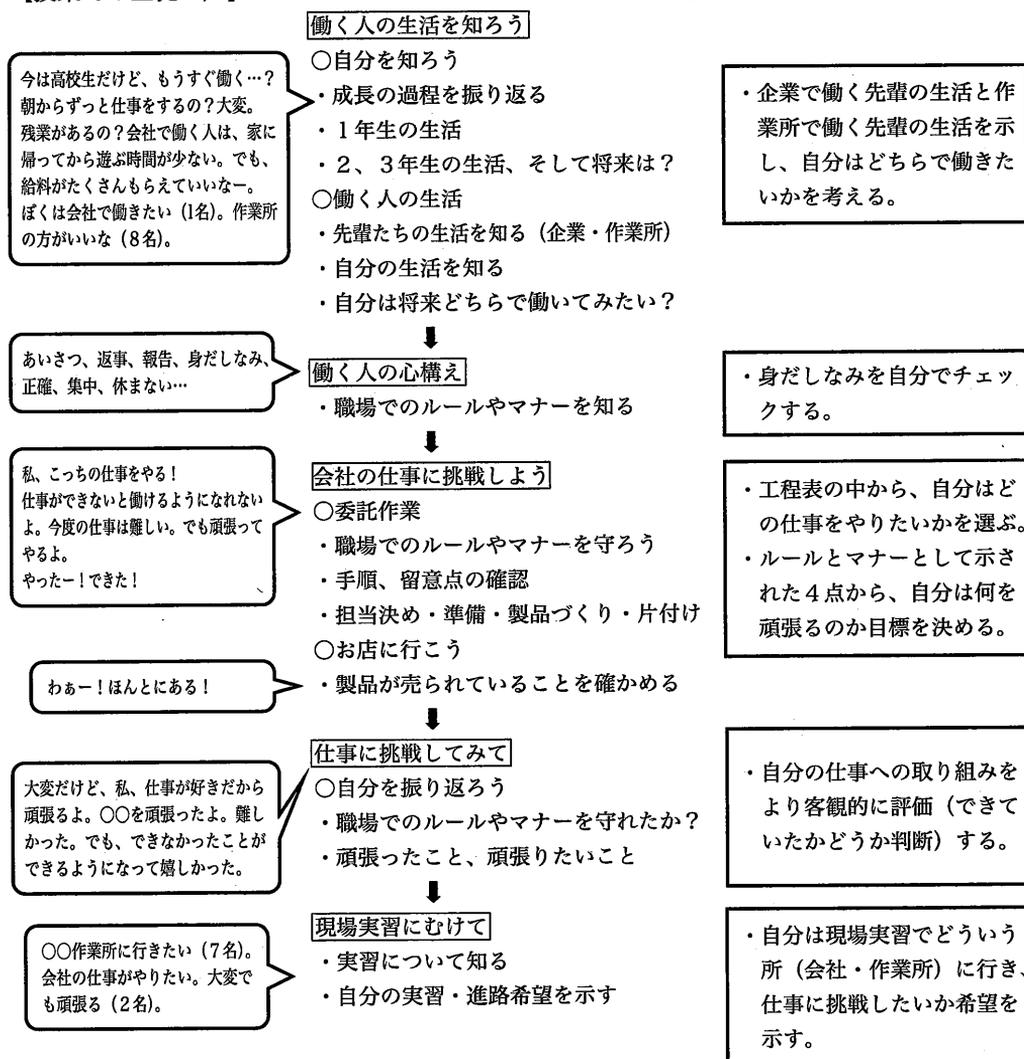
この単元「働く人をめざして」は、1年生にとって2回目の進路学習である。1回目は1学期に「初めての校内集中作業」という単元を行い、自分の成長を振り返り、もうすぐ社会人になることへの自覚をもち、自分の長所・短所を考えたり、いろいろな職業があることを学習したりした。その上で、校内集中作業<委託作業…インスタントコーヒー（瓶詰め）のキャップ

③ 単元の展開

1学期の単元「初めての校内集中作業」での授業を通して、生徒たちに「卒業したら働くのだ」という意識が芽生えたものの、自己理解の難しさや、継続的・段階的な指導の必要性が感じられた。そこで2学期の単元「働く人をめざして」は図II-2のように展開した。

【授業での生徒の声】

【主体的選択」「自己決定」の場面】



図II-2 単元「働く人をめざして」の展開

④ 単元を終えて

・小単元「働く人の生活を知ろう」の授業は、生徒たちが1学期に学習した「いろいろな仕事」を発展させる内容だった。生徒たちの1学期の様子から再度その内容を扱い、理解の定着

を促したいと考えた。生徒と教師の生れてからの成長を写真で見比べ、「自分たちが大人に近づいていること」「進路を考える時であること」の2点を初めに押さえた。次に、「自分たち（高校生）の生活」と「作業所で働く人の生活」「会社で働く人の生活」のそれぞれを一日のタイムスケジュール表で示すことで、仕事の時間や自由な時間の長さを見比べたり、給料（工賃）の額の違いを比べたりした。それらを見て、生徒全員が「夕方ゆっくりできる作業所で働きたい」とか「給料の多い会社で働きたい」といった自分の希望を言うことができた。生徒たちの考えがとても現実的になり、自分のこととして進路を考える姿勢が見られるようになり、成長や体験に基づく段階的・継続的な指導の有効性を感じることができた。

- 次の小単元「働く人の心構え」では、職場でのルールやマナーを「気持ちの良い挨拶、返事をする」「身だしなみをきちんと整える」「手順を守って、正確に仕事をする」「時間まで続けて仕事をする」の4点に絞り、黒板の掲示物や作業日誌に写真や絵を用いて示した。作業内容と工程も写真と短い言葉で示し、視覚的な支援を取り入れた。作業日誌を記入する際、教師に項目の内容を確認に来ていた生徒も、このようにしたことによって指示されていることが分かり、自分で考え判断し、身だしなみのチェックや目標決めを一人で行うことができた。

- 委託の作業種目に取り組む、4日間の校内集中作業（「会社の仕事に挑戦しよう」）では、3つの作業工程の中から自分が取り組む工程を自分で選択するようになった。今回のトレーナーハンガーの仕事は1年生にとって初めて経験する作業種だったので、最初にみんなで全工程に取り組んだ。その後、自分のやりたい工程はどれかを選ぶようにしたが、技術的には難しい工程を選ぶ生徒もいた。その生徒は4日続けてその工程を選び続けた。諦めることなく、一生懸命挑戦し続けた。そして3日目、部品をはめ込むコツを掴み一人で仕事ができたと、思わず「やったー！」と彼の口からこぼれた。それを聞き、周りの生徒たちも「すごい！」と彼の頑張りを認める声があがった。彼は集中作業に続く小単元「仕事に挑戦してみよう」では、「できなかったことが、できるようになって嬉しかった」「諦めずに仕事を続けることを頑張った」と述べ、成就感と満足感を味わっていた。

- 他の生徒たちも振り返りの授業で「大変だったけど、楽しかった」「難しかったけど、仕事はやりたい」とか、「返事と報告を頑張った」「正確を頑張った」「身だしなみを頑張りたい」といった声が聞かれ、自分で目標や作業工程を決め、仕事に取り組んだことが満足感や自信に繋がっていった。1年生の段階で、自己評価することを求める意義は大きいと思われる。

- 今回の単元「働く人をめざして」の授業実践を通し、生徒たちにとって「わかる情報」と、できた、頑張ったという「具体的な体験」とが結びつくことで自信を生じさせた。この学習体験は自己理解を深め、より主体的な進路選択へと繋がっていくのではないかと考える。

III B 養護学校高等部における授業実践

1 進路学習の年間計画

本校高等部では、生徒が自分の適性を知り、主体的に選択できる力や自己決定できる態度を身につけられるように、計画的な進路学習を実施している（表Ⅲ-1）。

表Ⅲ－１ 進路学習の計画(就労支援の領域)

学習内容	*ねらい ・指導事例		
	1年生	2年生	3年生
<職種> 調べ学習	*身近な人の職業を調べ、職種の理解の基礎を養う。	*いろいろな職種を調べ、職種の理解を深める。	*様々な職種の中から自分に合った仕事を見つけることができる。
	・家族の仕事、先輩の仕事、私の地域の作業所	・事業所と作業所	・卒業後の仕事
見学、体験	*先輩の実習先を見学し、職種の理解を広げる。 *様々な職種を体験し、職種の理解を深める。		*様々な職種を体験し、職種の理解を深めるとともに、適性を探る。
	・先輩の進路先や実習先見学、実習先選びの見学(個別に実施) ・作業体験、ビルメンテナンス講習会、短期実習(個別に実施)		・短期実習(個別に実施) ・ビルメンテナンス講習会
実習決意集会 実習報告会	*実習についての理解を深める(1年次) *上級生や同級生の実習先について、理解を深める(1,2年次) *実習に向けての決意を発表することができる。		*下級生や同級生の実習先について、理解を深める。 *実習に向けての決意を発表することができる。
短期実習	*様々な職種を経験し、社会にはどんな仕事があるのか理解する。		
<適性> 仕事	*自分の好きなことを見つけることができる。	*自分の適性を考えることができる。	*自分の将来の仕事を選択、決定することができる。
	・好きなこと・嫌いなこと ・将来の夢	・得意な仕事。苦手な仕事	・自分の適性と仕事
短期実習	*様々な職種を経験し、自分に適した仕事を考えることができる。		

2 授業実践：単元「見つけよう自分に合う仕事」

① 単元について

高等部2年においては、1年次の現場実習の経験をもとに、生活面や作業面の課題について、家庭や学校の生活全般の中で生活する力と働く力の両面を伸ばしていくことが大切である。同時に、主体的な進路選択に向けて、卒業後どんな生活をしたいのか？ 何のために仕事をするのか？ 社会にはどんな仕事があるのか？ 自分ができる仕事は何か？ など、選択や決定をしていくための基礎となる理解について学習を積み重ねていく時期であると言える。

高等部2年次の7月には、単元「見つけよう自分に合う仕事」を設定し、職種の理解や適性(表Ⅲ－1の太字部分)について学習を行った。この単元において、具体的な職種は、近年、

本校高等部の卒業生や生徒の就職先や実習先が製造業から、理美容業・クリーニング業・ビルメンテナンス業、老人福祉施設などのサービス業へ広がってきていることを考慮して、生徒が現場実習や進路先で取り組む可能性が高いと予想される2つの職種である、物を作る仕事（製造業）と、きれいにする仕事（サービス業）について取り上げた。単元は図Ⅲ-1のように展開した。物を作る仕事と、きれいにする仕事の2つの職種について、どんな仕事なのかを理解することと、やってみたい仕事を自分なりの理由を持って選択できることを単元のねらいとした。

② 生徒の選択状況

物を作る仕事と、きれいにする仕事のどちらをやってみたいのか、ワークシート（図Ⅲ-2）を使って選択する機会を、単元を通して3回設定した。生徒の選択状況は表Ⅲ-2の通りであった。3人の生徒については、選択状況やその理由について詳細に述べる。

表Ⅲ-2 生徒の選択状況

	物を作る仕事を選択した生徒	きれいにする仕事を選択した生徒	その他の選択をした生徒
選択①	F男 G子 G男 H男 H子 I子 J子 K子 I男	F子 J男	
選択②	F男 F子 G男 H男 H子 I子 J子 I男 J男		G子(両方やりたい) K子(両方やりたくない)
選択③	F男 F子 G子 G男 H子 I子 J子 I男 J男	H男 K子	

H男の選択や選択理由の変化

選択①：物を作る仕事	選択理由：「にえをするしごと」（原文のまま、意味は不明）
選択②：物を作る仕事	選択理由：「すぎ」
選択③：きれいにする仕事	選択理由：「すぎ」

H男は、校内での作業体験において、きれいにする仕事に取り組み、どんな仕事なのかを理解するとともに、自分にできそうだという自信が持てたことから、選択③では、きれいにする仕事を選択したと考えられる。保護者からは「先生から、きれいになったと誉められた事が嬉しいようで何回も話してくれる」という話も聞いた。単元終了後には、家庭で、風呂やトイレの掃除を本人の家事分担として取り組み始めた。また、ビルメンテナンス会社での仕事に興味を持ち、高等部2年10月にそこで現場実習を行った。実習先からは、仕事がいねいであり、清掃の基本はできているという評価を得ることができた。

K子の選択や選択理由の変化

選択①：物を作る仕事	選択理由：「やりたいから」
選択②：両方やりたくない	選択理由：「物を作る仕事はすぐに集中が切れて、慣れてきたら失敗する。きれいにする仕事はおおざっぱだから、やったところと、やらないところが出てしまう。動物の世話とか、小さい子のめんどうとかの、他の仕事のほうがいい」
選択③：きれいにする仕事	選択理由：「掃除のやり方を覚えれば、実習に行った時に役立つかもしれないから？」

学習の導入

- ・ 社会には、どんな仕事があるのか？
どんな種類の仕事をしている人が多いのか？
- ・ 『物を作る仕事』『きれいにする仕事』『売る仕事』『レストランの仕事』の順に多いことを知る。

選択① 物を作る仕事 きれいにする仕事
どちらの仕事をやりたいか その理由は？

校内での作業体験 (5日間で両方を体験)

物を作る仕事 贈答用茶箱作り 自動車電気部品組み立て	きれいにする仕事 雑巾がけ 床清掃
----------------------------------	-------------------------

先輩の進路先見学 (1日間)

物を作る仕事 バイク部品製造会社	きれいにする仕事 ビルメンテナンス会社
---------------------	------------------------

選択② 物を作る仕事 きれいにする仕事
どちらの仕事をやりたいか その理由は？

作業体験や見学のまとめ

- ・ 物を作る仕事と、きれいにする仕事について、内容や特徴、相違点や共通点をまとめる。

選択③ 物を作る仕事 きれいにする仕事
どちらの仕事をやりたいか その理由は？

校内での作業体験 (1日間)
(選択③で選択した作業を行う)

物を作る仕事 きれいにする仕事

学習のまとめ

- ・ 選択して取り組んだ仕事について、好きか、おもしろいか、人の役に立つかなどの項目ごとに自己評価する。

図Ⅲ-1 単元「見つけよう自分に合う仕事」の展開

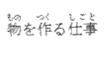
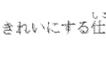
7月4日 やってみたい仕事はどちら？

物を作る仕事 	きれいにする仕事 
	
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
その仕事を選んだ理由	

図Ⅲ-2 選択③のワークシート

7月6日 まとめ

どちらの仕事を 選びましたか？

物を作る仕事 	きれいにする仕事 
---	--

作業中に感じた気持ちを、思い出してみよう。 ○をつける

この仕事は、好き	<input type="checkbox"/>
この仕事は、おもしろい	<input type="checkbox"/>
この仕事は、人の役に立つ	<input type="checkbox"/>
この仕事は、自分ができる	<input type="checkbox"/>
この仕事は、あきずに続けられる	<input type="checkbox"/>
この仕事は、実習でもやってみたい	<input type="checkbox"/>
この仕事は、自分に合っている	<input type="checkbox"/>

感想

図Ⅲ-3 学習のまとめワークシート

K子は、単元の学習前から、動物の世話の仕事や、小さい子のめんどうをみる仕事をしたいという目標を持っていた。単元の学習では、校内作業の選択であっても、動物の世話や小さい子の世話にこだわる姿が見られた。K子と話をする中で、トリマーや保育士助手など、資格が必要であったり、求人が限られていたりすることや、ペットショップなど他の仕事であっても動物に関わる職種もあることを話題にするようにした。選択③では、きれいにする仕事を選択して、その選択理由として掃除のやりかたを覚えることで、どの職場でも役立つのではないかと視野を広げて考えるように変容した。高等部2年10月には、本人の希望をもとに、ペットショップで現場実習を行った。仕事の内容は、店内清掃や商品陳列などであったが、熱心に取り組み、実習先からは真面目に仕事に取り組めたという評価を得た。単元の学習が、本人の希望職種を尊重しながら、現実的な進路を見つけていく機会になったと考える。

J男の選択や選択理由の変化

選択①：きれいにする仕事	選択理由：「ほうきを、きれいにゴミを集めながら、ちりとりをきれいに拭く。窓をきれいに拭いてやりたいです！」
選択②：物を作る仕事	選択理由：「自分はお茶の組み立てが得意。仕事に集中して、よそ見をしないで、仕事を続けたいです」
選択③：物を作る仕事	選択理由：「お茶の箱を作る仕事が好きです。お茶の箱を、よそ見をしないように、行動を早くすすめるようにしたいと思います」

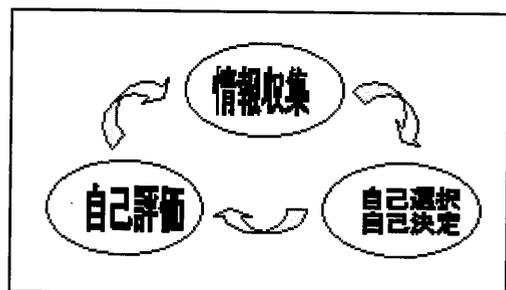
高等部1年では、J男は腰痛のため現場実習を行っていない。そのため、社会にはどんな仕事があるのか、自分には何ができそうかなど、仕事についての理解は十分ではなかった。J男の選択理由に注目すると、校内での作業体験や先輩の進路先見学を行った後では、「得意」「好き」という言葉が見られるように変化した。その仕事がどんなことをするのか、自分にはできそうかどうか、どんな価値がある仕事なのか、J男が体験を通して、その仕事について理解ができた結果であると考えられる。また、学習の終わりの感想（図Ⅲ-3のワークシートを使用）では、仕事を選ぶことは楽しかったという記述も見られた。

単元の終了後には、物を作る仕事を選択して取り組んだことをきっかけにして、本人が希望する部品製造会社で3日間の現場実習を行った。実習先からは、正確に仕事ができるという評価を得て、10月には2週間に期間を延長して実習に取り組むことができた。

③ 単元を終えて

本校高等部では、図Ⅲ-4にあるようなサイクルを繰り返して体験していくことで、自己理解を深めていくことができると考えている。

単元では、職種の理解や適性をねらいに、物をつくる仕事と、きれいにする仕事を取り上げ、選択して取り組む機会を設定した。その際、生徒自身が、どれだけ情報収集ができるのか、言い換えれば、選択肢についてどれだけ理解をした上で選択ができるのかが重要



図Ⅲ-4 自己理解の深まり

な点であると考えた。2つの仕事について、教師の説明を聞いただけの選択①と、5日間をかけて両方の仕事を実際に行い、実際の職場を見学した後の選択②、2つの仕事の相違点をクラスでまとめた後の選択③では、選択理由が深まっていく様子が、ほとんどの生徒に見られている。生徒の自己選択や自己決定を促進していく上で、選択肢についての体験的な理解が重要であることが確かめられた。

自己評価については、自分が選択して取り組んだ仕事について、感じたことを振り返り、さらに自分の希望を明確にしていくことが大切であると考えた。本單元では、図Ⅲ-3のワークシートのように、評価項目を教師から提示した。生徒は、校内での作業体験を思い出しながら、それぞれの項目に○や×をつけることができていた。こうした体験が、どんな基準で自分の進路を選択すればいいのか、その生徒なりに選択基準を作っていく土台になると考える。

生徒が自己理解を深めていくためには、図Ⅲ-4のように、体験を積み重ねていくサイクルが大切である。K子は、単元の学習と同時進行で、教師と希望職種についての話し合いをしたことで、現実的な進路を見つけていくことができた。H男は、きれいにする仕事の様子を家庭に伝え、家事としても取り組んだことで、単元後の現場実習先を明確にしていくことができた。生徒それぞれの願いをもとに、個別に支援を行ったことが、こうした成果につながったと考えている。

IV 主体的な進路選択のための授業づくり

・現場実習を体験するまでの進路学習

生徒が実際の職場や授産施設、作業所などで仕事の体験をする現場実習は、学校卒業後の生活を実感させる最も効果的な学習体験で、校内での学習には替えがたいものである。このため、各養護学校は高等部の3年間に何回かの現場実習を実施している。その現場実習で成果をおさめ、進路選択につながるために、仕事（職種）や職場などの理解と自己理解を深め、主体的な進路選択を促す進路学習が必要となる。

本稿に報告された2つの養護学校の授業実践は、高等部の1学年と2学年におけるもので、卒業後の日中活動の中心となる就労とその支援についての単元の展開である。生徒の実態は、まだ卒業後の働くことが中心になる生活についてのイメージがしっかり把握できていないことが多い。そこで、進路学習の単元は、経験の拡大と体験による情報の獲得を重視し、終日の校内集中作業や、いろいろな職業についての理解と啓発を行うための企業や作業所の見学、さらには自分たちが集中作業で作った製作物を販売している店などを見学する校外学習と関連させながら展開され、その後は現場実習（短期実習）につながる位置づけがされている。また、進路学習のねらいや目標は、校内集中作業などで生徒各自が取り組む作業種目や作業工程（作業内容）を自らの判断で選択することや、取り組んでできた製作物の出来ばえや作業活動の取り組み状況（ルールやマナー）についての自らの振り返りが主たるものになる。

3年間の進路学習の学習内容は、学級の生徒の実態に即して計画的に配置される。また、現場実習を行う時期との関連で配置されるが、B養護学校の授業報告者の記述にもあるように、選択や決定をしていくための基礎となる理解について学習や体験を積み重ねる必要がある。このためには、普段の作業学習、生活単元学習などの内容と体験に関連した学習の内容と授業の構築が欠かせない。この点からの授業研究が必要である。

・自己選択、自己決定のための学習支援

生徒の主体的な進路選択は、さまざまな情報に対して、自己理解に基づく自己選択、自己決定によって行われる。手島・吉利は、わが国における知的障害者の自己決定に必要な学習と支援に関する研究動向を把握するために、自己決定の構成要素として、本人主体、参加、プロセス（選択とその吟味）、選択権の行使の4つを挙げている。⁽¹⁰⁾ プロセスは、授業の中では授業者による生徒への自己選択、自己決定のための情報の提供であり、選択権の行使のためには、選択の機会が設けられ、さまざまな選択肢が準備される必要がある。内海も、学習支援の課題は、「選べる状況づくり」が基本になるだろうとして、そこでは、①本人の選択・決定や参加を尊重し、②選べる状況のなかで選ぶ経験を重ね、選ぶ力を形成するという2つの視点から検討することが求められる、と述べている。⁽¹¹⁾

A養護学校の単元「働く人をめざして」の小単元「会社の仕事に挑戦しよう」（4日間の校内集中作業）では、自分のやりたい作業工程（作業内容）を3つの工程から選択した。大半の生徒は自分のできる工程を選んでいますが、できる工程に加えて、それまではできなかった工程を選ぶ生徒もいた。この生徒は何度もハンガーの部品はめ込みに取り組み、ついに3日目にできなかった工程でできる体験を実現した。頑張ればできるのではと予測した（あるいは、頑張ることができるになりたいとの願いを持った）と思われる生徒の自発的な選択から、自己選択、自己決定する機会が設定されることの意義を確認することができる。

また、B養護学校の単元「見つけよう自分に合う仕事」では、校内での作業体験で行う作業種目について、自己選択、自己決定の機会が設定されている。作業種（職種）は、物を作る仕事（製造業）ときれいにする仕事（サービス業）の2つが提示された。この2つは生徒が現場実習やその後の進路先で取り組む可能性が高いと予想されるからと説明されているが、校内での作業体験でも設定されやすく、体験的な情報の提供が可能である。選択肢を2つにし、どちらかを選ぶという場面の設定は、情報の整理と理解、課題の焦点化を図るためである。自己選択、自己決定をするには、多様な選択肢が提示される必要があるが、生徒の理解の実態に即して、二者択一の選択場面を繰り返すことで、最終的には進路先を選ぶ力を形成することができる。

選択肢からどちらかを選ぶ際には、生徒の葛藤も予想される。自分の好きなこと・嫌いなこと、得意な仕事・苦手な仕事などの自己理解について、どちらも好きだとか、どっちも同じくらい苦手できそうにない、といった場合である。この単元の実践②でのK子のような場合である。2つの作業種の明確な違い（例えば、座ってする仕事か・立ってする仕事か、体全体を使ってする仕事か・指先の器用さが必要な仕事か、あるいは使用する道具の違い）を提示し、説明する必要がある。

また、この単元の展開では、やってみたい作業種を選択を3回させている。作業種の内容についての教師からの説明、5日間の作業体験や職場見学、それらを踏まえての学級集団による吟味の学習によって、2つの作業種についての理解を深めている。このように、段階的に学習が進行することによって、作業種の理解が図られ、作業種に対する自己理解（適性）が確かめられている。

こうして自己選択、自己決定がされるが、授業者による自己決定の結果と責任についての押さえが必要である。太田は、子どもの自己決定を重視した授業を展開する場合、授業者が授業展開の中で押さえるべきポイントとして、4つの視点の抽出を行っているが、「自己選択、決

定のための情報の提供」や「自己選択・決定の機会の設定」、「自己選択・決定の尊重の表明」の視点に比べて、「自己決定の結果と責任の通知」については明確に認められる授業が少ないことを指摘している。⁽¹²⁾ やってみたい作業種目や作業工程を自己選択、自己決定できたら、「自己決定の結果と責任の通知」を行い、生徒に結果の予測をさせることが自己決定の意義と重みを伝えることになり、この学習の機会を重ねることが生徒の主体的な進路選択に繋がるものとなろう。

・目標設定と自己評価のための学習支援

生徒の自己選択、自己決定を尊重することは、その希望や願いを実現するためであるから、生徒自らが目標を立て、取り組んだことについて自己評価をするプロセスが生まれる。手島は、アメリカの障害児教育における自己決定の展開状況を整理しているが、教育実践に向けて開発されている自己決定カリキュラムの共通点の1つに、生徒自身が選択した具体的な目標の達成を目指して組み立てられている点を挙げている。⁽¹³⁾ 生徒の実態に即した、目標設定の方法が検討されなければならない。

しかしながら、知的障害を伴う生徒にとって、自ら遂行可能である目標を適切に設定することは容易ではないと考えられる。霜田と井澤は、知的障害養護学校中学部の作業学習において、作業製品に対する仕上げの目標枚数と作業技術・態度に関する目標を生徒本人が設定し、作業終了後に設定した目標に対する自己評価を行うための手続きがとられた。その結果、対象生徒（CA15：3、IQ40）は目標枚数の適切な設定や正確な自己評価ができるようになり、それに伴い仕上げ枚数の向上がみられたが、作業技術や態度に関しては、自発的に適切な目標設定ができず、作業技術・態度の大きな改善はみられなかった。⁽¹⁴⁾

A養護学校の授業実践では、1学期の校内集中作業でしたことを振り返ったり、実際の会社や作業所の見学をしたりした後に、小単元「働く人の心構え」が展開された。ここでは、次の集中作業で目標としたい、仕事をするにあたって気をつけなければならないことが話し合わせ、総括して授業者は、「職場のルールやマナー」として「気持ちの良い挨拶、返事をする」「身だしなみをきちんと整える」「手順を守って、正確に仕事をする」「時間まで続けて仕事をする」の4点を示している。生徒は、作業技術や態度といった行動についての目標の設定や振り返りの意見や感想について、初めはうまく叙述できないこともある。そこで、サンプルを用意し、その中から選んだり、参考にして記入する方法が設定されている。作業日誌には写真や絵といった視覚的な支援を取り入れた。これによって、生徒は授業を重ねるにつれ、目標の設定を自分で行うことができた。作業活動が続ける中、目標の設定が自覚されることで、実現可能な目標を立てることができるようになる。

A養護学校の生徒は自分の立てた目標に対して、「頑張ったこと」の自己評価をしている。授業者は、作業活動中の様子を写した写真を見せ、応答的なやり取りによって感想の程度ではあるが、自己評価と今後の「頑張りたいこと」についての発言を導いている。

生徒の自己評価は作業能力や作業に臨む態度についてだけでなく、精神的な満足感などについての観点も必要である。泉は、進路学習や現場実習の実践を通して、自己評価の観点として最も大切にしたいのが、「できる」「できない」ではなく、自らの満足感や充足感・有用感などである、という。これらの観点をもとに自らを振り返る中で、自分の存在や自分の行動をできるだけ肯定的にとらえ、また、次の活動に主体的に取り組んでいこうとする前向きな姿につなげていきたい、としている。そこで生徒が一日の活動を振り返る観点は「にこにこ（楽しいこ

とや喜びの体験)。よしよし (達成感)。どきどき (感動)。ぼかぼか (支え合うことによる優しさの経験)」である。⁽¹⁵⁾ 肯定的な自己理解は、級友や教師らと共に作業活動する体験や働く喜びを共有することで図られ、深められる。

B養護学校の単元「見つけよう自分に合う仕事」では、生徒は校内での作業体験でやってみたい作業種に取り組んだ後に、作業中に感じた気持ちを自己評価している。記述するワークシートには取り組んだ仕事について「自分ができる」「あきずに続けられる」という項目の他に、「好き」「おもしろい」「人の役に立つ」「自分に合っている」といった観点から、多面的な理解を求めるものになっている。

・作業日誌・ワークシートの活用

本稿の2つの授業実践では、作業日誌やワークシートは、生徒が主体的に作業種目や作業工程(作業内容)の選択を行い、目標の設定と自己評価を進めるためのガイド・ツールである。

学習の支援にあたっては、課題についての情報や判断材料の提示の仕方が吟味されなくてはならない。何が問われていて、何を選ぶのかを明確に、選択肢の違いが際立つようにして提示されていなければならない。2つの作業種から1つを選択するためのワークシートでは、座ってする仕事か・立ってする仕事か、体全体を使ってする仕事か・指先の器用さが必要な仕事か、あるいは使用する道具の違いなどについて、対比ができるものが必要である。また、生徒の実態に応じて、視覚的な情報提供やわかりやすい説明が必要になる。

B養護学校の授業実践では、生徒はその作業種を選択した、自分なりの理由をワークシートに記している。選択状況に記載されているように、授業者は選択機会の順に生徒が記述した理由を読み返し、生徒の思いや願いを理解しようとしている。授業者は生徒と応答的なかかわりを持ち、生徒の作業種についての多面的な理解と生徒の思いや願いの交わる部分を確認しようとしている。

新しい進路指導の実践は、現場実習、進路相談、進路学習の3つを有機的に統合して、進行する。現場実習、作業学習などの作業体験や進路学習の記録が蓄積された作業日誌やワークシートを一貫するツールとして活用することで、生徒の思いや願いに沿った進路相談を行うことができる。

V 今後の課題

知的障害養護学校における、主体的な進路選択をめざした進路学習の授業づくりなどについて、今後の課題を以下に挙げる。

- ・障害の重度化、多様化に即した、自己理解(障害の理解、ひとりでもできること・手伝ってもらうこと)や自己選択、自己決定の支援方法、目標設定と目標に対する自己評価を行うための手続きを検討する必要がある。
- ・高等部3年間における進路学習のねらい、学習内容と配置、就労と生活の支援に着目した授業づくりについて、授業実践の集積に基づいた検討が必要である。
- ・生徒の社会についての認識や自己理解は、学級の仲間の意見や体験から影響を受け合って、深まる。進路学習の授業が行われる、生活単元学習や総合的な学習の時間の学習形態の特性を踏まえた、授業づくりの吟味が求められている。
- ・生徒は自己選択、自己決定にあたって、進路学習で学び得たものと、自らの希望や願い、価

価値観をすり合わせる。教育課程全体における豊かな体験と仲間とのかかわりに基づき、自らの価値観を育てることが必要である。

・進路学習（進路指導）の充実と併せて、個別の移行支援計画の整備、活用を検討する必要がある。

付 記

写真の掲載に際しては、当該生徒の保護者の快諾を得ております。記して感謝申し上げます。

文 献

- (1) 松矢勝宏監修、養護学校進路指導研究会編 主体性を支える個別の移行支援 大揚社 2004 p.29-43
- (2) 前掲書(1) p.9-28
- (3) 内海淳 職業教育の歴史(下)－進路指導の形成期と転換期 発達の遅れと教育 533 2002(1) p.50-51
- (4) 前掲書(1) p.9-28
- (5) 松矢勝宏 これからの移行支援－協力者会議報告「21世紀の特殊教育の在り方について」を踏まえて－ 発達の遅れと教育 531 2001(Ⅱ) p.4-7
- (6) 前掲書(1) p.99-100
- (7) 緒方直彦 高等部における進路学習の位置づけ－全国調査から 発達の遅れと教育 547 2003(3) p.11
- (8) 前掲書(1) p.29-43, p.82-90
- (9) 原智彦、内海淳、緒方直彦 転換期の進路指導と肯定的な自己理解の支援－進路学習と個別移行支援計画を中心に－ 発達障害研究 第25巻 第4号 2004 p.9-18
- (10) 手島由紀子、吉利宗久 わが国における知的障害者の自己決定に関する研究動向－学習と支援を中心に－ 川崎医療福祉学会誌 Vol.11 No.1 2001 p.211-217
- (11) 内海淳 自己決定と本人参加への支援② 発達の遅れと教育 466 1996(7) p.78-81
- (12) 太田正己 特別支援教育のための授業力を高める方法 黎明書房 2004 p.127-140
- (13) 手島由紀子 アメリカ合衆国の障害児教育における自己決定の展開 特殊教育学研 41(2) 2003 p.245-254
- (14) 霜田浩信、井澤信三 養護学校「作業学習」における知的障害児による目標設定・自己評価とその効果 特殊教育学研究 43(2) 2005 p.109-117
- (15) 泉弘志(山口大学教育学部附属養護学校高等部) ころいっばい 進路学習2005年前期現場実習レポート 月刊『実践障害児教育』 Vol.388 2005 p.9-17